



斐代
母事終
二

1加3
998
2





○
生シヨ
植ウヅ
門カド

蜀^{しやく} 藕^く 臘^{らつ} 千^{せん} 鐵^{てつ} 美^み 落^{らく} 伊^い 波^は 奈^な 之^し
豆^{まめ} 黍^き 梅^{うめ} 紅^{こう} 花^{はな} 蕉^{きやう} 生^{せい}

萬蘭草
鹹草

万年草

時計草

○器

用門

琴

筆葉簫

風呂敷

藤四郎焼

樂焼

金

奈良風呂

三線

印籠

常簾

渡茶盆

秋焼

葦屋釜

植田地祿

尺八

膳戸物

瀬戸物

井戸茶盆

乾山焼

阿弥陀堂形

隠元藥罐

鞍

大

割

萬年葛籠

蠟燭

紙拾

白粉

南方

出塞

雪踏

竹輿

馬幟

鎗

合羽

狭

仰子寺

摺元

揚技

常香盤

市方

千石

大八車

鐵炮

常鎗

桐油

傘

鴉杖

伽羅油

水

炮

常

衆物

猪牙舟

江戸辻駕

唐弓

加留多

本朝世事談綺卷之二

菊岡沾原述



生植

○西庇

寛永親王・琉球より薩摩へくる慶安の頃
長崎より僧義堂乃空花集と和名西庇・清和
西庇今見生東海・剖破金玉露濃
義堂・寛永のころの人なり・義堂手巾・藤堂家の
呉服・菱衣・某長崎より種を求め・津より
大守にゆく・則其家の弟宅に種を置く

○南ミナミ 北キタ

蜀黍

○玉蜀黍

○番椒

○
菰
豆

○
耳
諸

卷之四

五穀を食せし其穀を食するよりなりとありは憂
 と切根を根生て活と土人朝夕飯を充るゝハ憂
 粉して焦る民食を脚せ飢を救其利大
 かり肥前産する多樹を東武へ來ハ海産なり

○ 搗 搗

寛永のころ臺國より渡り來た樹のこゝろ

まろめろ



南蠻人沙糖を食
 ぶを煮加世伊太と
 ようく糖漿を治

○ 臘 梅

又南東梅

正保年中中々梅より渡り十二月より來た英のむく



臘梅 白ひらめ
 葉赤くおきお花は
 高は四五尺をこへ
 枝葉は刺あり科は
 冬も葉を落す

○ 植 桐

ひまわり

延宝年中一藩の御屋敷より其甚きを畧し
 船に其根を葉を包みおきて世に移す



植桐 一名唐桐
 葉は冬に五六寸にて皺る
 花は紅色臭樹の花
 似る夏秋に咲く

○秋海棠

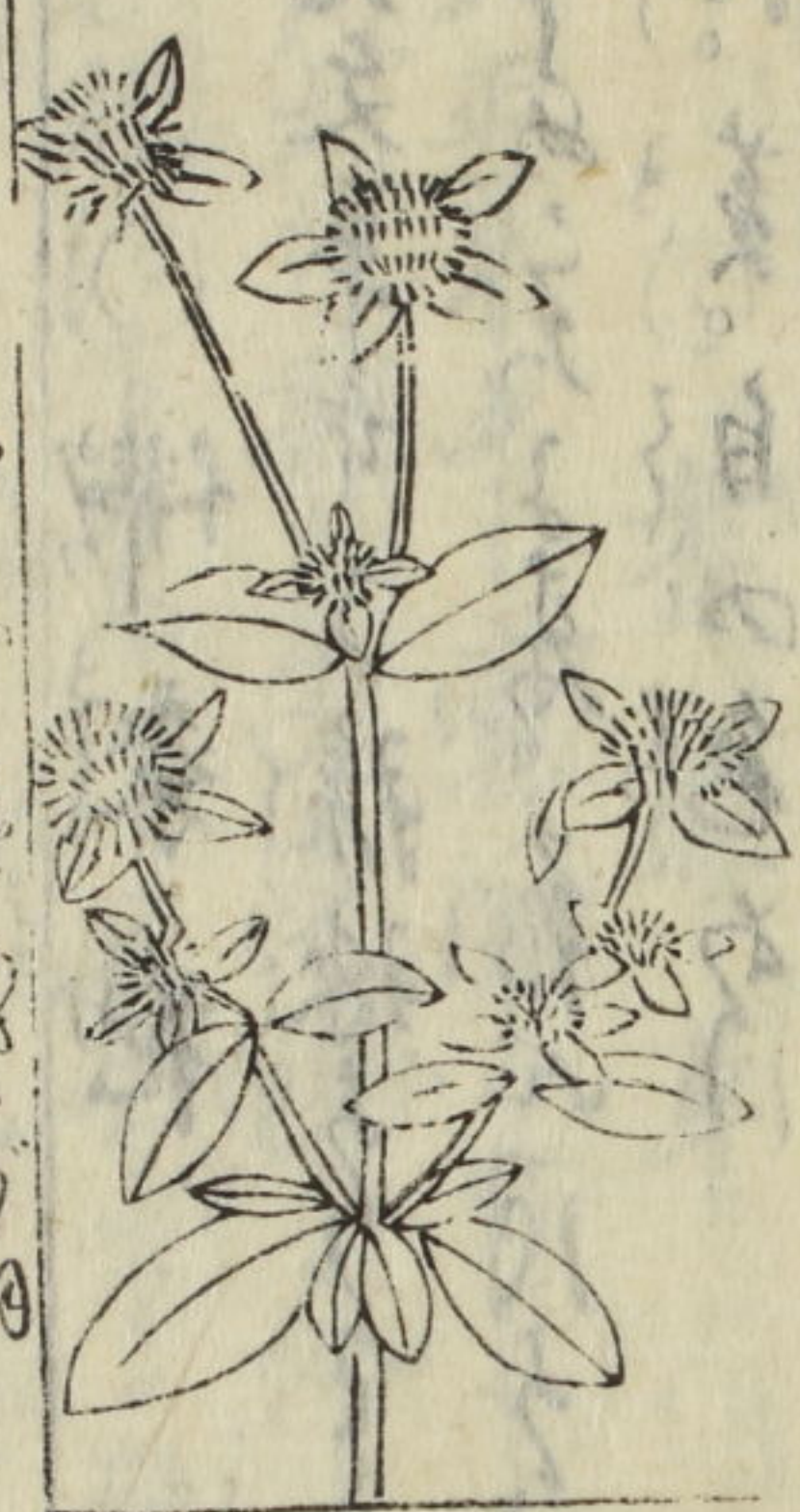
寛永年中中興より長清の波の草を記詩譜
秋海棠嬌冶柔軟其同美人捲粧此品喜
陰一見見日色則瘁九月收枝上黒子下略



秋海棠 一名新陽花
光の葉方より赤い赤い
紫右よりかゝるた
人花を月平く日
あゝ色を

○千日紅

天和年中中興より長清の波の草を記詩譜
色。葉は淡い葉なり寒を畏れ人々を喜ぶ雪を落し



千日紅
花葉よりあつて花形は
ふり冬より冬に
好花なり

○東浦塞牽牛花

寛永年中中興より長清の波の草を記詩譜
似て七八月紅の花なり根は其年枯る実をたて植

○朝鮮牽牛花

貞享年中に海より八月の月を花なり根は其年枯る実をたて植



葉は茹い
一名曼陀羅花と云
はるものなり

○鐵線花

寛文年中中華よりくる紫白の二種あり
四月花開く又葉の如き蔓草なり



鐵線花
葉の如き蔓草なり
四月花開く
根生ひ来春分枝する

○佛桑花

寛文年中琉球よりくる中絶して又舊傳の
如くあるものなり花は月より白く十月より
紅。黄。白の色あり

○蒼藤草

天正年中臺灣よりくる林を穿て花を咲かせ
實生と帝家の堂下よりく瘡癰を治すに
効腫にもよく又花の葉を煮て汁を
樽の下に置き蠶虱を避く書篋の中へ細く
生やんとし瘡癰癰を治す一書篋と置く
草といふに佐よりきたる一書篋の種なり



蒼藤草
春苗を生じ花を咲かせ
林を穿て花を咲かせ
花なり

美人蕉 一名紅蕉

天和年中琉球より来る落日花より多し一草
葉に紅蕉と名付く秋より花を
開く



本草云花色正紅
如榴花日折一兩
葉下略

○ 諸手卷

三月に花開く白き花を帯と紫色と二種あり花の
形龍鬚に似たり葉は如蓮葉の葉は解りるに二尺
ころに葉を帯と一丈四尺あり未開東より入る

松葉

延室のころ大抵の傍花にして希なり一葉
下より上へ三月五月の百漏く和あり
美乃中より入る葉を合し其味淡其して美なり
本領より有非高者云三四月生苗下略是れ松葉の



松葉

高さ五尺あり付るより
花を遠く葉は如蓮の
又松葉あり

○ 落花生

元禄のころより来る典籍便覧より云及の真を葉
扁より似て花開く地より一花は就て一草

を根く大い根のあり深秋味甘くし人甚愛に

日老いあり又此瘡瘻破なるも八九人をこけ夏死罪

子小豆のやうにして葉つるごとくその実の如し

はる終るふありあてあまのふひの月いそいそはあ



實



○箱根草

相列葉根つあり葉の南七すいて細き莖

葉、根杏子似てちのうく根葉のあり
夏後、血をえりて一年紅毛の葉をえて
良草ありを根く清く搗く甚珍なり



○伊波奈之

江列三井寺の中あり二月に花開く虎耳草
花の似たりゆくらふ花なり二月に子を結ぶ
大に大なる葉の如きその葉の色青く

中は葉を去り皮を去て合時酸甘

○葛蘭草

又張良草

日光を愛ふの頂ある大草一丈余の
莖生のはて二丈ほある莖葉もに落
莖五六寸周り葉六七尺四角花は
白く黄色なり古根大く為根



葛蘭草
夏より秋まで
花は
実ハ菊の如く
してわつらば

○カキ草

高野山大師の御廟ありてその一夜日あつてを採
と云はれし草を水に浮めて他國の人の舌を炙るに余
なるは草水中に浮て生るものなり



カキ草

此草は水に浮る苔の類なり
状松の葉の如くなり

○時計草

享保の始よりある花五月のけりあり秋まで咲く紅白紫
の色あり花三重なり葉多く葉を澤山とす
一月の中色もにかり花形なり

公華をその人々姉妹を降り後、
 檢校院徒より上永後二
 二線より合に今ハ花紫樂々
 負享のそる東中、卒ス千時
 七十余、至るに城あり

三
線

永祿年中琉球より海よりその時に蛇皮を以て張る
 或人衆列堺の盲人中中落とあるものこそせし
 中落虎沢と云盲人幸て彼より海を以て始
 慶長の海沢前と盲人長巻の名人なり
 二條をも殊一小舟にのりてその海福徳節
 舟外より舟中を載り海に沈み解はり
 舟外より舟中を載り海に沈み解はり

[illegible]

○尺

はうのやうなうへともれたる者もありて
 蘇我の皇子中智懐良親王なり
 吉野拾遺云けうのまのまのうへともれたる
 古河尺八をゆへ天竺の歌を傳へせ給ふ吉野の
 幸よりせ給ふとんぬるるるるるるるるるる
 ゐりぬ上もめづるるるるるるるるるる
 管絃記云馬融狀長笛空洞無底刻其上五
 穴一穴出其背一法大板節をつめて一尺八分
 けりるるるるるるるるるるるるるるるるる
 りるるるるるるるるるるるるるるるるる
 黄鐘調し左の右の上下の指づひ三十二品あり

筆葉のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて
 始祖の宗作るるるるるるるるるるるるる
 教院より安田城長より大森宗空者善吹尺八
 羅の文集云頃年有大森宗空者善吹尺八
 是都宜作指田一首中くくくくくくくくく
 作宜作指田一首中くくくくくくくくく

○筆葉

指陽のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて
 筆葉のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて
 筆葉のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて

○印

印のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて
 印のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて
 印のうへに彩のまのまのうへともれたる者もありて

入の類をまじひぬを葉茶と云下茶の一室な
れものて蓋を中へて合せ風の入ぬやうに
もて今茶の葉茶蓋と云ふこの葉茶のり
ひく事し今葉茶のりと云ふなり

○ 勝

中茶のりひの塩袋の遠用なり大茶袋と
古茶に云日本式なる事証の時お茶袋のり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
ける時其味佳は実合なる事証なる事なり
いふ事をいふ方を新茶と云ふ遠用茶と云ふ
大茶袋をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり

よ入てお茶のりをとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり

○ 風品 敷

元風品の揚るる葉茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり
新茶のり遠用をとりひき茶のり大茶をとり

○菅 簾

草木より作りしものと賣地する如く正徳と云ふ所は地味小糸糸が
の良具物沖ちて要作の支國楊東海山と云ふ所を金と云ふ
くめを賣

○瀬戸物

和漢三才圖會云尾列瀬戸の陶器盛に作故磁器
を以て瀬戸を名とせり

○藤四郎焼

以徳川の朝にが後江戸を造るに陶人ありて其
小き掛作は是茶入に成り其業未熟なり口派り
掛し焼くより口元にて是を元と云ふ
而後建曆年中、永平寺の僧通之利ありて其
家より陶家の秘事を習ひ海防の役あり

下の地を昔重にせし其を略して後平と云
後平製し春慶と号す

○渡 茶 益

三浦の建曆の年と云ふる藤の上品に其の細く
三浦の建曆の年と云ふる藤の上品に其の細く
朝鮮咸鏡道の地と云ふ大槓高臺西裏に茶益の
碑ありて渡唐屋金海寺なり其の司繪を舞
棘腕刷毛目雲鶴等其の教品あり

○井戸茶益

上品の茶を朝鮮征伐の時井戸左衛門尉持来り
秀吉より献じ何事か物なり井戸と号せり
井戸版是より亞丁大槓細なる製文あり一丈六

○樂焼

文祿の陶朝四郎と云ふ人を焼い茶碗二品
 有るありし事、樂の器を焼く者、古くは
 樂の焼くありし時、千利休朝鮮の陶造を招き
 利休状を製して茶碗をやしむ朝鮮の
 朝の器をとりて朝四郎と号し又樂の器を
 焼くを焼くといふ事、樂の焼くといふ事、
 樂の加茂、石のありし事、出来ど是れ、
 樂の焼くといふ事、石のありし事、
 樂の焼くといふ事、石のありし事、
 樂の焼くといふ事、石のありし事、

○萩焼

毛利輝元高舞の陶造を招きこれを焼く

その事を云ふ事、毛利輝元、門田秋房
 城主、其時、萩の陶工、萩の陶工、
 萩の陶工、萩の陶工、萩の陶工、

○乾山焼

尾形深省、萩の陶工、萩の陶工、
 萩の陶工、萩の陶工、萩の陶工、

○金

三才圖會云、古くは、尾形、
 茶碗、尾形、尾形、尾形、
 車軸、車軸、車軸、車軸、
 あり、あり、あり、あり、

○鞍轡

明徳神皇の頂大坪左多紀の御ありて生國五別遷金
 只し難髪して通禪と云い人奔馬神宮を祈
 中し海鏡の曲尺を以て通禪の作の鞍轡と云
 と稱し且遠方に行くと云ふ其鞍轡を以て馬
 痛むに御軍義満公の鞍轡を以て云ふ
 流るる御大坪流と稱して歩け流を以て
 由無神作の神を省て作の鞍轡の鞍轡と云
 修勢流 修勢古負継と云人乗馬の法鞍轡乃
 妙手大坪道禪より傳へ一流を以て之を云
 負継平負盛十二代の裔し御軍義満公
 以て進習しその子負盛より傳へ妙手大坪
 流るる御大坪流と稱して歩け流を以て

○馬轡

大永のころ北条氏康の長大道寺に於て
 甲陽軍經より出たり又信長公の時本末吉と云
 とて侍大坪の御ありて之を以て大坪と云
 と云ふ此の御の御ありて云

○鐵炮

弘治元年南蠻人氏志俱智と云琉球國
 より鳥嘴銃を造る事を教へ琉球より薩列
 多補傳より傳へる同年三月京師に入て義輝公
 執しその御を以て而後佐々木義俊に令て
 江列國友村に居候させし義俊則て傳へる
 石炭の地を以て之の石炭を以て今も此の地

とんくろ 二代家源之妻又年余下子檢一而卒
強檢成、餘尾の檢とあり

○管 餘

慶長のふに別佐和の主大谷刑戸始て以て
刑部病ありありの中へ入るも其の管轄
を更とて事始云々たる如く初始て作とあり
接しとて不苗字未だにさあて来ぬ
へとてさうとてさうとてさうとて
自由なとてさうとてさうとて
刑戸を始たる如くあり

○割 符

竹の長さすいて二つ割て是を合符符と云ふ

よきとてさうとてさうとて漢文部竹使符を作し
郡國ちとありと半合して太い糸線とあり
郡ちとありとこれ割符の何とあり

○合 羽 桐 油

合羽の中古のものとして上右の義を用ひ軍用とあり
今義符としてあり義を細く具し合羽の元元合羽
を何人の義と其の細くあり合羽を合せてあり

○桐 油

桐子油桐とありありとありは其の油とあり
今在の油を用ひとありと桐油とありと本草に云
桐子油とありと小く長く事屋とありと其子を収めて

油に在の油は知る又云は油を以物を塗る
五色を製する白色の常の漆のあらざるしは油を塗る
よりさして固く相油漆と云又和脂を和へて
とをぬるより漏るるを解して知也年塗と云

○万年葛籠 并紅紙

元禄のころ神田隈那はら其甚き漆といふもの
をぬるより漏るるを解して知也年塗と云
ぬるし其高今の業由

○狹箱

信長公の時より始まるより狹箱といふ作を
衣物を狹き用也狹作のなりを狹箱といふ又

對狹箱にて行列するに其書公の時布衣久月
何れぬるをなれ

○傘

天正のころ堺の商人が助成と云ふ小琉球の
より品家より文禄二年に本邦へ移るに時
茶壺五十箇傘蠟燭各千挺活唐香の類二丈木を
秀吉公へ獻じ數千金を賜ふ其傘の後始りて形を本
より作る或書平宗盛の傘あり是は是は

○蠟燭

元禄年中より日本に蠟燭を輸入せる
下より倣てその形を蠟燭を採るに
五種あり漆樹 荏桐 椿 タネ木 烏 白木

女貞の木よりともなふにあり雍列府志云
 黄白の蜜菓の皮は凝滓ををて蠟とて
 唐らしきまゝに霞をぬきしめて
 清のあまのし草のくさりを煮て
 上品のうじり軍用にもふか
 を書なる夜もぬじり軍中にも
 むのきり大毎日のあまのし草の
 かしらに蠟をぬきしめて
 又不用のまゝに有難きものなりぬ
 ○仰願寺蠟燭 世俗にて
 江戸山谷の仰願寺の用祖仰願上人の起る
 弘明念佛を修せしむる所なり

らるるの大きなうじり又小きい事
 ようて細くともなふて長き蠟燭
 指佛堂のうじりなり

○ 燈 杖

燈の明るるものなり老人の病を
 明るものなり又云漢記儀志曰仲秋月
 ハ九十の老人は杖を賜ふ杖の
 により燈の杖をぬきしめて又云
 燈の杖をぬきしめて又云
 燈の杖をぬきしめて又云

○ 紙 捻

又髪捻トキ

中身と云ふの髪捻なり紙をひ
 うりえ捻なり又髪捻なり紙を

てあつた髪を洗ひし又髪を洗ふの長く用ひ
平元元年紙をすくうに於て巻く事
日本紀云天武天皇詔曰自今以後男女悉結髪

○摺え結

寛文のころ摺紙拾をりて結て水うけり車
もて儀をつけて水を摺出するを結し又七
文結といふその紙のふしをりて結ある紙を
い紙を結する紙上品といふ

○伽羅油

正保のころ京室所製之文書素けり後
三條の市宇賀縫子の五ノ月書を製し
是の大好菴者虫毒をりてけり其の

胡の油に檀下子等以浸し白じ油と稱
ちる髪を付る金及金を用と又髪を
髪を結する人適にあつての油は髪を
事とせし頃年漆の事の髪を結し
用ゆりし

○白粉

持統天皇六年始に紅粉をりてありと
粉をりて度長え和のころ京列堺
京のころの大明のころのころ又小西
のころのころ小西法云云高橋守久
得る所の法し小西和京同は萬のころ
乃白粉甚佳なりとて異國人を賣去

○楊枝

或人の云揚校い迫世の製なりと云ふその勢をいん
義に云迫代の物にあはれ散家集

是れを所なりをうひの縁ひ事の時
 佛在せりありて楊枝淨水と云事經文
 又業を盡と經ありこれ楊枝の
 たる唐といふ事中經に云く也永平寺の
 道元禪師入京し楊枝をつひて天臺の
 如淨禪師甚感しられりと云事なり
 今中と云ふやうにをへる事。元を以て
 是といふ是本朝の矩掇なりと云

今南方已定甲兵なすのくま 法女細云花乃
系子ありうきことのりねえとーらぬきと
くぬけるも焚とかり

常香盤

近世製く 東方海より香を採る者多しと云ふ
本に吉政を云信く造るを上品と云 園西の法別
園ハ別ノ寺院より吉政造るを所ふもの
如、浪所より後田向深き住と祖父よりお
傳く三代此香を採るを所と云 三代目太吉
を庚戌年採る子テ人あきと云ふ 金王業と
あてて藤屋丸屋なる所にて茶屋と云ふ
は香を採る者よりと云ふと皆工なるもの

○ 烟 管

多きこの後、時席の紙を巻てたき紙のこ
うきもの、散ありひ、細き竹をそとてふね
たき、煙りてぬき、羅山文集云、他波古
草名採之、乾暴刺其葉而貼于紙捲之吹火
吸其烟、下署、流、先、の、繪、を、用、ある、の、類、の
事なり、え、和、元、年、六、月、廿、八、日、天、下、一、統、多、岐
古、湯、湯、止、あり、ある、その、白、木、屋、の、の、者、柳、系
の、封、疆、を、ある、につ、ある、を、食、の、蔬、の、下、に、あ、ひ、た、き、を
を、る、る、渠、が、を、ふ、い、か、く、す、び、ー、き、湯、湯、止、の
儘、の、つ、き、る、者、う、き、を、捨、て、る、事、か、り、る、世、の、人
ぬ、む、な、れ、と、追、ひ、く、の、あ、り、る、事、と、考、へ、る、京、大、坂

玉をたりのこす^鎌るび^人の^本を^あめ^るや^ない^んあ
又^玉帝^い著^めと^云年^しを^を柄^に加^へて^初子^の日^を祭^る
室^をす^く夜^の具^なし^をを^あめ^るさ^いと^云め^とい^ふそ^の夜^を

○雪踏

千^と利^の休^みゆ^て車^を作^りし^む雪^中の^路次^に入^り濕^る
無^きを^いそ^と羊^を履^き又^そう^をを^から^ぬ糸^をを^裏付^け
そ^うと^した^に濕^のぬ^るを^をと^りて^裏に^を
牛^の皮^をを^作る^雪の^うを^踏と^して^理を^とり^て雪^踏
と^名付^ける^今都^の車^をを^用ひ^て

○千石錠

貞^きま^のこ^ろ車^を式^に通^じて^車を^作る^とい^ふの
工^をま^しは^りめ^てこ^のを^造る

○乗物

概^{して}車^の殿^の時^は好^む乗^物に^乗り^し人^は俗^に
御^所車^とい^ふの^車を^深く^形を^とり^て
輿^とい^ふ四^角高^花云^輿車^無輪^也輿^の下^の
二^の轆^を深^く上^の一^の轆^を用^ひて^駕と^いふ^高貴^な
乃^の歩^りの^輿と^いふ^とい^ふも^の也^とい^ふ
ラ^ーし^駕の^車に^車駕^とい^ふ車^の形^のを^とり^て
古^史考^に曰^く黃^帝作^車少^昊時^加牛^禹時^奚仲^云
云^人加^馬に^るを^加ふ^とい^ふ

○竹駕

竹^を駕^に輿^とい^ふもの^を今^能役^者の^車と^いふ
と^いふ^便輿^の車^し竹^をも^をい^と漬^して^便輿^に

元軍用の具し、子負かゝは、多し。のし、ハ、
 嗣信を復興、
 又た、
 九、
 三才圖會云、復興、即、監興、而、賤民、常用之、竹籠、

○大八車

寛文年中、
 今大八、
 一、
 猪牙舟

○猪牙舟

明暦のころ、
 もの、

く、
 近年、
 元禄の末、
 近き者、

○江戸辻駕

元禄の末、
 近き者、

○唐弓

明暦年中、
 人、
 以、
 二十、
 何、

○賀留多

河東人市を以て寛永のころ長崎港の人民
倣て戯せり凡四品十二枚、四種の紋あり一程ハ
倣須と云南蠻ノ紋を倣須波多と云ふては紋
の状を畫く又波字と云青色を波字と云
は紋青と云色をハ彩と云又古津と云ハ酒盃をハ
古津と云し酒盃の形を教と云又波字留と云
小玉を稱して波字留と云し別々状あり
松十法師の形を畫し僧形を教に松十一騎
馬の人を畫く士を教と云十二騎馬の人を畫く
ハ庶人を教と云ふて又加字、字半須半と云
あり是處ハ南蠻國の紋なり

